

同じことで、責任と心勞とに何も差異はありませんまい。」
かやうに答へてゐる折柄、ルーズヴェルトは戻つて來て、
この問答を聞知り、夫人に向つて、「御身は言はずとよいこ
とをお話したものだ。閣下の偉勳に對しては恥かしい
極みである。」と、少女のやうに顔を赤らめながら、改めて元
帥と熱烈な握手を交した。その光景は實にゆかしい限
であつた。なほこの會合の際、簡單にして含蓄ある元帥
の言葉を、その通り通譯するには頗る苦心した。」
かれこれするうち、午後三時となつたので、盡きぬ名残を惜
みつゝも、元帥は主人夫妻に別れを告げた。
「おゝ、もうお歸りですか、私のこの邸は、これまで幾多の名

士を迎へたが、まだ君のやうな榮譽ある人を迎へた事がない。恐らくは將來に於てもさうであらう。さらば君
よ、ますます御健勝で、國家並に人道のため全力をお盡し
下さい。」

夫人は兩眼に涙を湛へて、堅い握手を交し、

「今日はようおいで下さいました。私は主人と共に永久
に今日を記念し、毎日お贈物を拜見しつゝ、お目にかゝつ
たつもりでお懷かしみ申し上げ、且御健康を祈りませう。
くれぐれも御機嫌よういらせられませ。」

さすが沈黙な元帥も、この誠意の籠つた別辭には深い感動
を受けたものか、微かに顫を帯びた音聲で、重ねて懇慫に別

れを告げ、自動車に乗つて邸を辭した。折しも颯と吹來る涼風は、残る暑さを何處へか拂ひ去つてしまつた。それから間も無く、元帥は合衆國を辭して丹波丸に乗船し、同國艦隊司令官の指揮の下に、二隻の巡洋艦に灣外まで送られて、歸朝の途に就いた。

今年の春であつた、東郷元帥と會談の折、ふとした話の序からルーズヴェルトの事に及んだ。すると、元帥は、

「彼がゐたらなあ。」

と、さも感慨深げに歎息せられた。眞に同感だ。意氣相投合したこの兩雄は、共に信仰の英雄で、同時に又至誠の勇士である。

東郷元帥曰く、

「天は正義に與し、神は至誠に感ず。」

ルーズヴェルト曰く、

「神を畏れよ、而して汝の義務を盡せ。」

（鐵櫻漫談）

一四 千代の松原

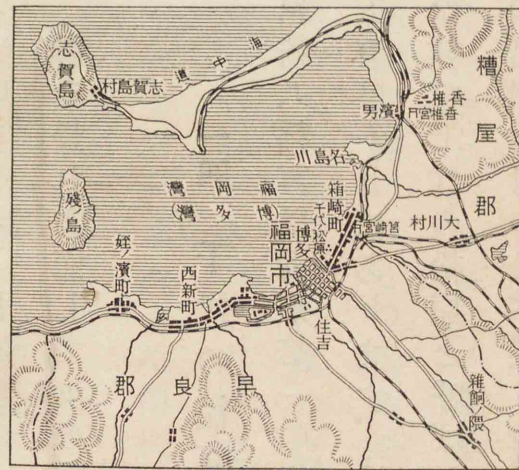
大類 伸

宮崎八幡宮は九州第一の都會たる福岡市から東の方二十五町ばかりにあります。博多灣の波近く、あたりは一帶の松林で、千代の松原と呼ばれてゐます。波の靜かな博多灣の沿岸は、目の及ぶ限り白砂と青松とで、其の間に遙か遠く人家の群つてゐるのが見えます。これが福岡市です。

大類伸
歴史家
文學博士
東北帝國大學教
授
明治十七年東京
市生

博多灣の水は、それはく美しい藍色をしてゐます。それ

が、灣を縁取つてゐる白砂青松を一層美しく見せるのです。殊に薄く霞んだ海上には、残島や志賀島が小山の如く浮んで居ります。さうして海の中道と呼ぶ細く長い半島が、弓狀をなして博多灣を抱いてゐます。



福岡市附近

千代の松原は福岡の東公園になつてゐます。處々に茶店が出てゐて、遊覧の人が年中絶えません。池の内には緋鯉

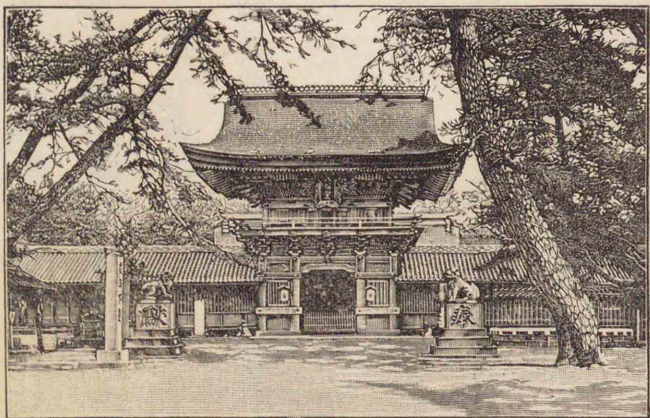


箱崎千代松原

身を以て國難に
代らうとなされ
たお方
龜山上皇
第九十代
在位十五年
嘉元三年（九六五）
崩御
壽五十七

がたくさんゐます。女子供がそれに魅を與へるのも、また一興であります。

松原の間を彼方此方とさまよつてゐるうち、ゆくりなくも一つの廣場へ出ました。そこには高い記念像が立つてゐました。全部石造で、高い立派な臺の上に、束帶姿の氣高いお方が立つてゐられます。それは、畏くも、蒙古の大舉來寇に際して、身を以て國難に代らうとなされた御方の尊像です。その神々しい御姿で、儼



宮 幡 八 崎 宮

日蓮上人
鎌倉時代の傑僧
日蓮宗の開祖
弘安五年（一九四）
寂
年六十一



日蓮上人像

龜山皇上尊像

然と松林の上から海の彼方遙かに異國の空をお望み遊ばされてゐる御有様は、實に御勇壯の極と申したい程です。

此の御像の前を辭して、暫く歩いてゐますと、又杉林の間から突然眞黒な大法師の現れたのに吃驚しました。それは日蓮上人の大銅像でした。上人は蒙古襲來の以前に安國論といふものを作つて、國民が信仰を

小早川隆景
毛利元就の第三子
慶長二年（一五七）
卒
年六十五

怠ると、いづれ大國難に出逢ふと警告したのでしたが、やがて蒙古襲來といふ大事件が起りましたので、人々は上人の豫言の當つたのに驚きました。さうして上人を信じました。其の關係で銅像を此處に建てたのです。銅像の前には參詣者が絶えません。始終線香の煙が濛々と立ちのぼつてゐます。

それから少し行くと、宮崎八幡宮の樓門の前へ出ました。此の門も、御宮の御殿も、元寇當時のものではなく、三百餘年前小早川隆景の建てたものです。しかし、如何にも神さびた建物で、神威の程も察せられます。私が參詣した時には、門前に鳩がたくさん飛んでゐて、如何にも平和で、昔此處が

戦場であつたなどとは思はれませんでした。社のあたりを徘徊してゐる間に、日も暮方になりましたので、名残惜しくも、別れを告げて福岡の旅舎に向ひました。（史蹟めぐり）

三木露風

名は採

羅風と號したこ

ともある

詩人

明治二十二年兵

庫縣龍野町生

宮崎

福岡縣糟屋郡箱

崎町千代松原に

ある宮崎宮

俗に宮崎八幡宮

といふ

一五 鳩

三木露風

ゆるやかに飛びかふ鳩よ、

宮崎の

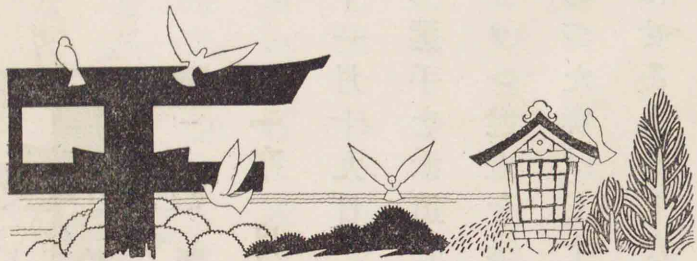
社の門に幾百羽、

くゝくゝくゝと鳴く聲の、

樓の棟木の上に充つ。



多々羅の濱
箱崎の海濱



雄鳩雌鳩も幾百羽、

右に左に、上下に、

翼をならし、首をふり、

せはしくあゆみ、日は暮るゝ。

御前の海は果てしなく、

多々羅の濱に寄る波の

くだけは寄り、はひのぼり、

松の根越に光る見ゆ。

戦のあと夢となる。

國の鎮

宮崎宮には醍醐天皇の宸筆の寫「敵國降伏」の額などがある

十一月十九日

明治四十四年

萬國オリンピック

ク大會

International Olympic Meeting

マラソン競走

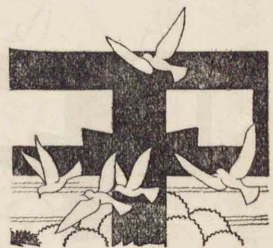
Marathon Race

高等師範

東京高等師範學

校

金栗四三



國の鎮としづまりいます

宮崎の社の門に幾百羽、

くくくくくくと鳴く鳩よ。(青き樹かげ)

一六 月桂冠を目指して

十一月十九日。我が國がはじめて萬國オリンピック大會へ選手を派遣しようとして、その豫選の爲に日本最初のマラソン競走を舉行する日である。當時高等師範の學生であつた僕は、二十五哩といふ長距離は人間の體力で走りおほせるものでないとか、マラソン競走に無理をすれば内臓が潰れてしまふなどといふ浮説に不安を感じながらも、一

國を代表して世界の檜舞臺に上れるかも知れぬといふ夢のやうな望を懷いて、この半月が程は毎日の練習を怠らなかつた。

この日は鉛色の鈍重な雲が一面に大空を蔽うて、今にも雨になりさうで薄ら寒い朝の大氣に、我知らずなる武者振ひを禁じ得なかつた。午前十時頃僕等三人は羽田の會場に着いて、特に設けられた休養所に入り、靜かに身を横たへて時を待つた。そこには應援に来てくれた先輩や同窓の學生が居合せて、今日出場する選手たちの批評や勝負の豫想などを語り合つてゐる。不忍池畔五周競走に嶄然頭角を現した猛者、八里を二時間に走つた新進をはじめ、鎌倉から、

僕等三人

金栗四三

野口源三郎

橋本三郎

三人ともに當時

東京高等師範學

校の生徒で競走

の選手であつた

羽田

東京府荏原郡羽

田町

不忍池

東京市上野公園

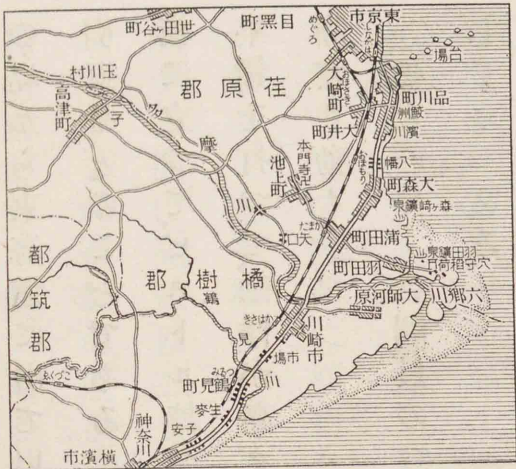
にある

周圍約十二町

名古屋から、姫路から、或は遠く北海道からなど、はるゝ参加した選手は總て十二名、いづれ劣らぬ一粒選りであるとのことである。僕は仰臥瞑目して、ともすれば興奮し、さうな心を安靜に保たうと力めてゐたが、聞くともなくそれらの會話が耳に入るにつけ、自分の力が甚だしく弱小に感ぜられてならぬ。雑多の事柄が次から次へと心頭を掠めて徂徠する。

時は進んで十一時になつた。僕は徐ろに起上つて生卵二箇と食パン四半斤とを食べた。食欲は殆ど無い。今日を晴の競走を眼前に控へては、豫測し難い結果に對する不安と焦慮とに支配されて感情は自ら平靜を保持し得ぬので

あつた。今日出場する他の選手とても、恐らく僕と同様であつたであらう。



京濱地方

紫帽子に半袖のシャツ、膝にかかる長いパンツといふ輕装で運動場に出た。出發線に並んだものは十二名である。寒氣のせゐるか、氣後れか、それとも勇氣横溢しての武者振ひか、思はず全身が顫へる。海風は凄じく吹いて、黒雲の動きが慌しい。たうとう氷雨は横なぐりにやつて來た。

コース
Course

六郷川
玉川の下流
川崎市の北を東
へ流れる

ピストル
Pistol

出發合圖員は外套の襟を高く立て、首を深く埋めてコースの説明をした。言葉は時々風の唸りに途切れたが、六郷川の堤から東海道に出て、川崎・鶴見を過ぎ、東神奈川へ行つて引返せとのことである。説明が終ると、合圖員は選手の斜横に立つて、ピストル持つ手を上方に伸した。僕の心臓は早鐘を打つて、動悸が高まる。膝は静止しようとしても間斷なく動く。

「あと一分。」合圖員の宣告は僕の心臓を抉る、動悸は混亂しさうである。

「あと三十秒。」握り締めた手から油汗が滲む。

「あと十秒。」海風の咆哮などはもう僕の耳に入らない。

トラック
Track

食ひしばつた齒が憂々と顫へる。無我夢中である。

「用意！」其の言葉に續いて「ずどん」と號砲が一發。同時に聲援が四方から涌く。僕は夢か現か、殆ど跳ね飛ばされるやうに走り出した。

トラックは内側に傾斜してゐる。雨の爲に滑る、泥と水とが飛ぶ。走りにくいと思ひながら四百米のトラックを二周する間に、先頭は二番を約二百米も離れて場外に走り去つた。これが北海道出の選手である。續いてかねてから其の名を知られてゐる選手が四人、前後して場外に去つた。僕は其の後からこれら各選手の後塵を追うて場外に出た。六番目である。見渡すと、先頭は群を抜いて唯一人走つて

川崎町
今は川崎市

ある。雨は烈しくなる、道は滑る、寒風も堤の上には一入強く吹きすさぶ。今日の選手を出した各學校の應援旗と聲援隊とは、堤から川崎町へと入り亂れて飛ぶ。練習中に傷めてゐた僕の膝は、堤の途中から遂に疼み出した。跛を引くやうに走つて、東海道に出て、川崎の町に懸ると、百二三十米の前方を走つて行く一人が眼に入つた。せめて五着位にと、膝の疼みを忍んで只管その選手を追うた。かうして競技場から三里も走つたと思ふ頃、不思議にも膝の疼みは忘れたやうに消去つた。何たる幸運であらう。喜悅と自信とが僕の體内に溢れるやうに覺えた。その刹那から急に元氣が出て、次第に其の選手に肉薄して競走を

メガフォン
Megaphone

續けた結果、東神奈川の手前でたうとうこれを抜くことが出來た。膝の好調子に乗じて力走する間に、又その前の二人をも抜いて、意氣揚々と引返點に走り入つた。此處の審判員は熱血兒として當時の運動界に知れわたつてゐる人であつたが、メガフォンを口にあて、
「がんばれつ、がんばれつ。」
と熱狂して連呼し、通過の章を背中に捺してくれた。歸りは非常に氣分がよい。殊に三人も抜いた後は、勝利者の誇を意識して、疲労は消失する、氣力は増加する。更に前の選手を抜く氣になつて足を早めた。此の頃から雨はどしや降りになつた。帽子の紫色が流れ出て顔やシャツを

染める。處々に陣取つて激勵の聲援を送つてくれる同窓に逢ふと、一層緊張して走る。やがて川崎町の入口に近づいた時、四五臺の自轉車に圍まれて走る一選手の姿が、街道の松並木の間に見え隠れした。それに接近することが限なく愉快である。いよくその選手に近づいて調子を見ると、僕以上に疲れてゐる。僕は優越感によつて急に身が輕くなつたのを覺えて、容易にそれを抜いてしまつた。しかし他の人から見たら、抜いた僕の足取りも蹣々跟々たるものであつたに相違ない。その時、應援の一人が大聲に、

「もう一人だぞ、たつた一人だ。しつかりやれつ。」

とどなつてくれた。此の「もう一人」といふ言葉が、疲れた僕

に取つては非常な激勵であつた。しかし、此の時は足も腰も膝も殆ど無感覺になつてゐた。

川崎を通過してからは、到る處に三人五人と紫の三角旗を振つて、同窓が聲援してくれる。六郷川の橋に出て見ると、他校の應援者に交つて、紫三角旗が遠く羽田方面まで續いてゐる。僕が長い橋上に疲勞困憊の姿を現すや、「わあつ」といふ鬨の聲と「萬歳」の叫喚とが起つた。

「來た來たあ。金栗だあつ！」

「金栗！ 先の一人を抜けつ！ 弱つて居るぞ！」

吹荒む六郷堤の寒風に和して、鬨の聲が怒濤の如く涌く。いよく羽田は眼前になつた。紫三角旗は雨中を入亂れ

て運動場の方へ飛ぶ。疲れきつた僕も興奮せざるを得ない。滑りがちな堤にさしかゝつてしばらく走ると、もう運動場の旗が見える。その時はるか四百米の前方に、走り行く一人の姿が見えた。これが先頭の北海道出の選手であるが、往路の雄姿にも似ず、疲れた復路の後姿は孤城落日の觀とでもいふべきであつた。僕の姿などは一層悲慘なものであつたらう。

二人の距離は次第に縮められて、僕はたうとう先頭に追いついた。それから二人は並んで走つた。物言ふ餘力もない。足は彈力を失つて、手を振る力さへたえどである。二人とも同じやうに顎を突き出し、斜め上の方を見つめて

走つた。彈力の失せた足はたゞ上下に動くだけで、體は惰力によつて辛うじて前進するのである。道の兩側に堵を成した應援者は躍起となつて聲援を送るけれども、二人はたゞ無言である。僕は決勝點を目指す外、心頭何物もない。その中に氣がつくと、今まで右側にあたつて振られてゐた手がいつか見えなくなつて、足音も後から聞えて来る。僕は相手を抜いて今先頭にあるのだ。しかし振返つて後を見るだけの餘力もなく、又先頭に立つた事が嬉しくもない。たゞ決勝點に入ることのみを念じてゐた。

運動場の近くには、數町に互つて觀衆の人垣が出来てゐて、紫三角旗は人垣の上に翻つてゐる。「金栗」と呼ぶ聲も聞え

た「萬歳」の叫も響いた。僕は最後の元氣を奮ひ起してトラ



金栗選手

ックに駈込んで、蹠跟としなが
らも餘力のすべてをこめて決
勝線のテープを切つた。其の
時は唯重い責任を果たした安心
が胸に在つたばかり、觀衆や應
援者の拍手も歡呼も耳には入
らない。第一着といふことが
まるで夢のやうであつた。

翌日の新聞紙で、僕のレコードが二時三十二分四十五秒で
あつて、當時マラソンの世界記録たるアメリカ人の二時五

テープ

僕等

金栗四三

三島彌彦

ストックホルム

スウェーデ
ンの首府

橘南谿

宮川春暉

伊勢の醫師

文人

文化二年(四六五)

歿

年五十三

藤樹先生

中江與右衛門

名は原

近江の儒者

慶安元年(三〇八)

歿

年四十一

十五分十八秒に比較して驚嘆に値する優秀なものである
ことが報ぜられた。痛む足を引きずつて登校した僕は、友
達からその新聞記事を見せられて、込みあげてくる涙をと
どめ得なかつた。

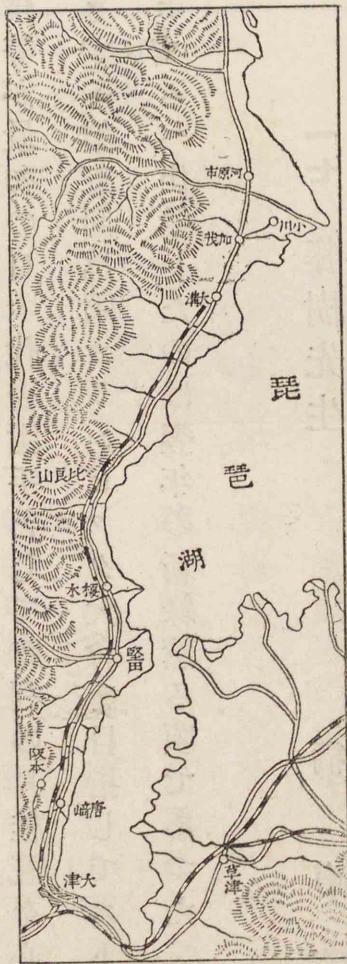
僕等が最初の日本代表選手として、勝利の月桂冠を心に描
きつゝ、第五回萬國オリンピック大會を目指してストック
ホルムへ出發したのは、翌年の新緑薫る頃であつた。

一七 藤樹先生

橘 南 谿

或時、加賀の飛脚、金子二百兩を預り持ちて京へ上るに、江州
河原市より馬を雇ひて、榎木の宿に至りて泊りぬ。馬方、河

原市に歸りて馬を洗はんと鞍を解きしに鞍の下より財布一つ出でたり。取上げて見れば金二百兩あり。馬方大い



琵琶湖附近

に驚き「今の飛脚の取忘れたるにこそ」と思へば、そのまゝ榎木に走り行きて、飛脚の宿れる宿に到り、對面して委しく尋ね問ふに、相違無ければ、其の金を取り出して返しけり。飛脚は死したる者の蘇りたるこゝちして、喜のあまり、行李



中江藤樹 (藤樹書院藏)

より別の金子十五兩を取り出して馬方に與へ「もし此の二百兩なくば、己が一命を失ふのみならず、親兄弟までも重き罪に到らん。さればその恩、なかなか言葉のいひ盡すべきにあらねども、まづ當座の御禮までに贈り奉る」と涙を流して喜ぶ。馬方大いに驚きし顔色にて「そなたの金をそなたに取りをさめ給ふに、何の禮れいごといふことあるべき」とて、手にだに取らず。色々にこしらへいへども、更に受けずして歸らんとする故

筆蹟
致良知

致良知

中江藤樹筆蹟

已むことを得ず十兩と減じ、五兩となし、三兩となし、段々減じて、終には金二步となし、せめてこればかりは我が心の悦なれば、受け給ふべし。さなくては、我が心も濟み申さず、今宵も寐ね難し」と、理を盡し詞を盡していふにぞ、此の金を受け申す程ならば、二百兩をも留め置き申すべし。かく返し申すからには、聊かにても謝禮を受くるは我が心にあらず。さりとて餘儀なくのたまへば、さらば、鳥目二百文を賜はるべし。これは、今夜休むべき處をこれまで追懸け來れる賃錢なり。これは我が取るべき錢なれば、申し請くべし」とい

ひて、二百文にて酒を買ひて其の家の人に振舞ひ、我も酔ふ程飲みて歸らんとす。

飛脚も感に堪へかね、さるにても、そこはいかなる人にておはする」と問ふに、「名ある者にあらず、又何一つ知れる者にあらず。只我が在所の近所に小川村といふ處あり。此の村に與右衛門といふ人おはして、夜毎に講釋といふことをす。某も折節行きて聞き侍りしに、親には孝を盡すべし。主人は大切にすべきものなり。人の物は取らぬものなり。無理・非道は行ふべからず。などいふこと、常に語り給ふにより、今日の金子も、我が物に非ざれば、取るべき理なしと心得しまでのことなり」といひすて、歸りぬ。

熊澤次郎八

號は番山

岡山藩に仕へて

治績をあげた

元祿四年(三三)

歿

年七十三

飛脚はそれより京へ上りて、いつもの宿に到り、さてもこの度は辛き命生きのびて、各方にも對面することゝなりぬ。とて、ありし次第を委しく語りけり。折節其の家の裏に熊澤次郎八、田舎より上りゐて學問修業最中なりしが、此の物語を聞きて、其の人こそ誠の儒といふものなれ。とて、其の翌日すぐに江州に至りて、小川村を尋ねて隨從を願はれしに、人に教へ申すべき程の學徳なし。とて更に隨從を許し給はず。熊澤只管に願ひて、二日が間藤樹の門に佇みて歸らず。藤樹の老母之を氣の毒がり、とにかくに、まづ内に入れ申せよ。とありし故、いなみ難くて内に入れ、終に師弟の契約をせられけりとぞ。

備前

備前侯池田光政

天和二年(三四)

卒

年七十四

南條文雄

佛教學者

文學博士

福井縣生

昭和二年歿

年七十九

耶馬溪

大分縣下毛郡山

國谷

雲華上人

畫僧

名は大舍

嘉永三年(五〇)

歿

年七十八

賴山陽

名は襄

通稱は久太郎

儒者

安藝の人

天保三年(四九)

歿

年五十三

その後藤樹を備前より招きたまひしに、その身は病身なりとて固く辭し、門人熊澤といふものあり、御役にも立つべきものなり。とて熊澤を出されけり。いづれも格別のことなり。(東遊記)

一八 知行合一

南條文雄

豊前の山國谷に正行寺といふ眞宗の寺がある。住職大舍は雲華と號し、文學を好み、書畫を能くし、廣く文人墨客と交り、別して賴山陽とは無二の親友であつた。山陽は三十九の年に九州を遊歴したが、山國谷の景勝を探つたのは雲華上人の手引であつた。山陽が「耶馬溪山天下無」と激賞して

忠臣は
忠臣必出^{ハズ}ニ孝子
之門^ニ（千字文の
註）

た老師は、やをら起つて、山陽に面會した。山陽は初見の挨拶をすましてから、自分の書いた「楠公傳」の稿本をその懷から取出した。そして慇懃に「老師の御批評を」と言つた。老師はその表紙にちらと一瞥を與へたまゝで、手に取らうともしなかつた。さうして、靜かに口を切つた。

「この頃噂に聞けば、藝州の儒者で頼久太郎とやらいふもの、京へ出て酒ばかり飲んでゐて、三年が間たゞの一度も歸省して親の安否を尋ねようともせず、そして忠臣楠公の傳を作つたといふことだが、では御邊の事でござつたか。この時、法海師の鋭い眼光は山陽の面上を電のやうに射た。山陽は我知らず面を伏せた。法海師は更に語を繼いで、忠臣

は必ず孝子の門に出づ。』とは古人の金言だが、三年も歸省せぬ不孝者の筆を以て忠臣の傳を書くとは、大それた事ではないか。楠公の靈若し知るあらば、果して何と思はれるであらう。愚僧もそんな不孝者には會ひたうない。老師はかく言ひ終つて、すつと起つて元の座に歸り、靜かに讀經すること初の如くであつた。

程經て、やつと頭を舉げた山陽は、冷たい汗が首筋を傳うて流れるのに氣が附いた。が、今は取着く島もない。老師の前に默禮して寺門を出た。

「さすが一宗の學頭、偉い和尚だ。」これが當時文名一世に鳴る豪快無比の山陽の腹の底から搾り出された感歎の辭で

あつた。

陽明學
明の大儒王陽明
の唱へた知行合
一の學說

夏日の日
冬日の日
趙衰、冬日之日
也、趙盾夏日之
日也。
註に「冬日可レ
愛、夏日可レ畏。」
(左傳)

あとで雲華上人に一部始終を話すと、上人は如何にも我が意を得たといふやうに、「さうであつたか。それはよく言つてくれた。貴公は豫て陽明學をやつてゐるではないか。知行合一、今こそそれを實行すべき時である。」といった。

山陽は覺えず立ち上つて、「法海師は夏日の日、上人は冬日の日だ」といふや否や、早々行李をとゝのへ、翌日早朝に發足して老母の膝下に歸省すべく安藝の國へと急いだ。

山陽はその後年々歸省して老母を慰め、又これを京都に迎へ、吉野や伊勢にお伴して孝養を盡した。「興行吾亦行、興止

吾亦止^もといふ「侍興歌^{せいこう}」などに於て數々の美談を遺したのも、基づく所は兩師の言を虚心に受入れた爲である。「虚にして往き、實にして歸る。」とは、實にこの事で、山陽が善く學ぶ所に背かなかつたのも、全くこれによるのである。（修養錄）

堀口大學

詩人

明治二十五年東京市生

一九 雪は降る

堀口大學

雪は降る！ 雪は降る！

見よかし、天の祭なり！

空なる神の殿堂に

冬の祭ぞ^{たげ}闌なる！



たえまなく雪は降る。

をどれ、をどれ、鶴らよ！

うたへかし、鶴ら。

降る雪の白さの中にて！

いと聖く雪は降る。

沈黙の中に散る花瓣！

雪はしとやかに



踊りつゝ地上に來る。

雪は降る！ 雪は降る！

白き翼の聖天使！

我等が庭に、身のまはりに、

さゝやき、歌ひ、雪は降る。

降り來るは惠の麴麴なり！

小さき白き雪の足！



地上にも、屋根の上にも、

いと白く雪は降る。(遠き薔薇)



二〇 雪夜の宴

天町 桂月

大町桂月
名は芳衛
文章家
高知縣高知市生
大正十四年歿
年五十七

「何と寒い晩ではござらぬか。成程雪がふる

石見の豪族益田藤包は、雪ふりしきる空を眺めながら、かく

つぶやいた。

「まだ十一月にもならぬに、實にめづらしい大雪でござる。」

と袖うでをつたのは、出雲の豪族三澤爲虎である。

「しかし、益田氏、雪が深いどころの話ではござらぬ。たつた

六千の兵が八萬の大軍に押寄せられて、我等はまるで囊の

馬野山
鳥取縣東伯郡橋
津村東郷池の北
にある小山

木下秀吉

後の豊臣秀吉

吉川元春

毛利元就の第二

子

尼子氏を滅し秀

吉と對抗してゐ

た

天正十四年(三四

〇)歿

年五十七

中の鼠ではござらぬか。此の馬野山は別に要害といふで
はなし、あの高い山の上から大軍に見下されて、たまつたも



(料史像肖) 春 元 川 吉

といふ御決心。拙者は餘りの無謀と存ずるが、貴公の御考

のではござらぬ。敵の大將は智勇兼備の木下秀吉、如何に味方の大將吉川元春公が鬼神のやうな勇者でも、六千と八萬との對陣では、とても勝てる筈がない。それに何ぞや、後の大川の橋をうちこはして、一足も後へは引かぬ

は。

「拙者も至極御同感でござる。さりながら、陰でいかほど愚痴をこぼしたとて、しかたのない話、これから共に本陣へ参つて、元春公をお諫め致さうではござらぬか。」

「承知いたしました。」

馬の嘶き合ふ聲ばかりを残して、雪は山陰の山野を埋めつくした。その白雪も物凄い夜の色に包まれて、日本海を渡つて来る風ばかりが元氣に叫んでゐる。

兩將は、やがて元春の前へ出た。

元春は一向平氣で、少しも平生の様子と變らない。

「これは、よくおぢやつた。我等無骨なる武士の身では

ふうかはり
そのすま

この初雪に一首といふ風流も出ないが、せめて酒でも飲んで寒さを凌ぐといたさう。

爐の前で酒宴が開かれた。

あまり元春の様子が平氣であるから、兩將も氣おくれがして、それを言ひ出しかねた。

その中に、元春はだんく酔つてくる。終に寐てしまつた。

嗚呼わが豪膽なる吉川元春は、八萬の大敵を前に控へながら、高射でぐうくと眠つてゐるのである。兩將はたゞ呆

れて空しく陣屋へ歸つた。

かくて夜が明けた。

秀吉の兵數千人、糧食を種石城へ送らうとして出掛けた。

種石城

鳥取縣東伯郡花見村にあつた城當時秀吉方の將南條元續がこれを守つてゐた

元春は鐵砲組に命じて之を打たせ、敵の一將を斃した。やがて敵の兵がなほ萬人餘り續いて出て來た。元春の子の元長・經言の二人はわづかに二千の兵を率ゐてこれに向つた。秀吉は之を見て、急に命じて兵を收めた。南條元續が、「なぜ戰爭なさらぬか」と問うたけれども、秀吉は笑つて答へなかつた。

翌日、秀吉は兵を引いて去つた。元長は之を追撃しようとして請うたが、元春は許さなかつた。二三日たつて、元春は馬野山を出立して安藝へ歸つた。

元春がわづか六千の兵で、落着き拂つて馬野山に據り、橋まで斷つて歸路をなくしたのは、どういふわけであらうか。

秀吉が八萬の大軍を率ゐてゐながら、戦はずに去つたのは、
どういふわけであらうか。英雄たゞよく英雄の心を知る。
とても益田・三澤などの知り得る所ではない。



小早川隆景 (安藝國豊田郡米山寺藏)

とにかくに、元春が孤兵を以て馬
野山にたてこもり、秀吉の八萬の
軍と對陣して、遂に秀吉をして空
しく引返さしめたのは、古來山陰
道で起つた出來事の中で、最も壯
快なる出來事である。

この時元春の弟の隆景は、出雲の富田まで來て、そこにとま
つて、馬野山へは援兵を出さなかつた。翌年四月、秀吉は備

隆景 小早川隆景
毛利元就の第三子
慶長二年(一五七六)歿
年六十五
富田 島根縣能美郡廣瀬町にある
尼子氏吉川氏の城址

中に入つて高松城を攻めた。隆景はこの城を援はうとし
て更に援を元春に乞うた。元春の諸將は異口同音に「去年
馬野山の陣の時、隆景公は高みの見物をしてゐながら、御自
分の都合の悪い時ばかり援兵を乞はれる。餘り自分勝手
な話である」と不服を唱へたが、元春はひとり首を振つて「去
年隆景が援けに來なかつたのは、何かわけがあつたであら
う。今その急を聞いては、毛利家のために、だまつては居ら
れぬ。各方がいやならば、拙者は一人でも援けにゆく」と言
ひきつた。諸將は其の友情の厚いのに感服して、ひたすら
に詫入つたといふことである。

馬野山に籠つた勇ましい決心と、何事も打棄てゝ弟を援け

に出掛けた優しい心根とは、よく元春の人物性格を表してゐる。元春は實に日本武士の粹である。(桂月文選)

ペンギン

Penguin

杉村楚人冠
名は廣太郎
新聞記者
明治五年和歌山
市生

二一 ペンギン

杉村楚人冠

春の來らんとする南極の曉を待ちわびて、何處よりともなく南極圈に押寄せる一群の奇怪千萬な鳥がある。この鳥は氷の上に泳ぎ着くと、さながら隊伍を組んだやうに打連れて、一様に立つて歩いて行く。これがすなはちペンギンである。

凡そ天下にペンギンほど人を馬鹿にしたものはない。ぎよろりとした目玉を光らせて、人間のやうに兩脚でえつち

らおつちらと立つて歩く。背中には黒腹には白の綿毛が一ぱいに生えて、兩の翼が短く垂れてゐる。翼といつても

短いから、これで飛ぶ

わけに行かぬ。唯時

時これをふたくと

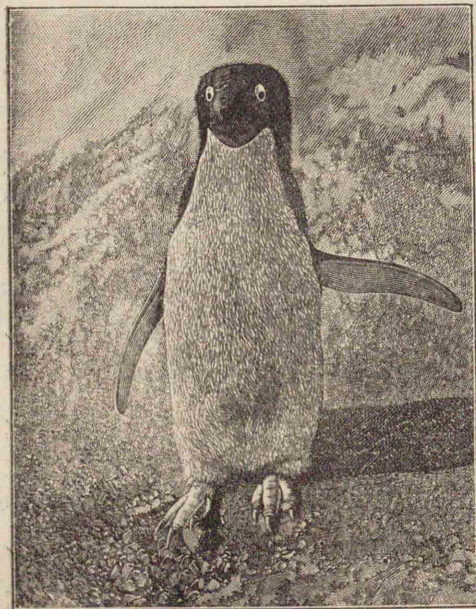
上下に叩いて、一には

身體の調子を取り、一

には之を敵と戦ふ時

の武器に使ふ。見た

ところは、さながら小作りな人間が、黒の燕尾服に白のチョッキ、白のズボンで、兩手を振つて歩くやう。殊に或種のペ



ペンギン

チョッキ
Jacket
の訛といふ

ネクタイ
襟飾

ンギンは、丁度襟の處に黒い線があるので、まるで黒のネクタイをつけたやうに見える。

人間に似た所はこればかりでない。ペンギンとペンギンとが出會ふ時は、互にお辭儀をするやうに首を下げる。春先此の南極圈へ移つて來て、然るべき處へ銘々の巢を作つてしまへば、農閑の伊勢詣とでもいふ風に、大勢團體を組んで旅行に出掛ける。其の時は、一人の總指揮官があつて、一同は其の命に従つて連れだつて行く。ペンギンの植民地ともいふべき處には、何十萬といふ大變な數が一所に集つて巢をくふが、其の間に何等かの制裁が行はれるものと見えて、餘り甚だしい喧嘩はしない。中には、近所に親を失つ

ノルデンショル
ド
Nordenskjöld
(1832—1901)
瑞典の有名な探検家

たみなし子鳥が心細げに巢に取殘されて暮してゐるのを見ると、自分の手に引取つて、養育一切の世話をやくといふやうな義侠心に富んだものもある。又此の鳥は大變な見え坊で、胸の白い處が一寸でも泥にまみれて汚れてゐると、仲間の鳥どもが、例の人を馬鹿にしたやうな顔を見合せて互に嘲り合ふ。こゝらも頗る人間に似てゐる。「善惡共に似た所が餘り多いので、何だか之を殺すには忍びなかつた」と、探検家のノルデンショルドも言つてゐる。

種類は色々あるが、其の立つて歩くことは一つである。翼が小さくて飛ぶことの出來ぬものが、どうして海を隔てた北の方から渡つて來るかといふと、これは前にも言つた通

り泳いで來るのである。泳ぐのは魚類のやうに身體の調子で泳ぐのであつて、兩翼は唯其の釣合を取るに止る。泳ぐに脚を使はぬことは、兩脚に繩をつけて小舟を曳かせると平氣で泳いで行くのでも知れる。

水では泳ぐが、陸では歩く。處で、敵に追ひかけられたとか何とかで、大急ぎに駈出さうといふ時は、忽ち身を倒して腹這になつて、一瀉千里の勢で、橈の様に氷の上を滑り走る。其の早いことは、人間業では到底追ひつけぬ位である。

ペンギンは寒さを知らぬ。如何に寒い時でも、平氣で水の中を泳ぎもすれば、平氣で雪の中を歩きまはりもする。何

しろ彼の暖かさうな毛皮があつて、其の下には厚い脂肪がある。暖かいにちがひない。こんな話もある。ペンギンが立錐の地を遺さず集つて來た夜、大風雪が吹きすさんで、一夜やまなかつたが、さて翌朝になると、さしも何萬といふ數を知らぬ位集つてゐたペンギンが、一夜の中に殆ど半分に減つてゐた。さてはさすがのペンギンも風に吹飛ばされるか、雪に凍えて死ぬかしたのだらうとばかり思つてゐたら、いづくんぞ知らん、此等姿を隠したペンギンといふのは、盡く雪の下に埋つただけで、やがて晝近くなつて、あたりが大分暖まつて來ると、一同申し合せたやうに、雪をかきわけてもぐり出て來たとのこと。



ペンギンの群居

ペンギンはかはいゝ恰好の鳥である上に、其の容貌・動作が如何にも滑稽じみてゐるので、極地探検家の無聊を慰めること一通りでない。第一に人を人とも恐れず、まるで友達のやうに人の側へ寄つて来て、何やら話しかける。蓄音機でもやれば、大勢で之を聴きに來る。さうして互に顔を見合せて、如何にも感

に堪へたやうな顔をし合ふ。それに又容易に人に馴れる。或時之を二羽捕つて来て、名をつけて、餌を與へて愛養してゐた者があつた。すると、かはいゝかな、彼等は腹がへると、其の人の指をつゝきに行き、遠く遊びに出てゐても、名さへ呼べば飛んで歸る。さうして、其の人が一たび外に出ると、二羽ともひよこゝと尾を振立てゝ、ひたもの其の後を追ひまはして、ついて行かねば承知しなかつたといふ。

近頃よく「をさまつてゐる」といふ言葉を使ふ人があるが、ペンギンの容體は、此の「をさまつてゐる」の一語に盡きる。ペンギンほど大をさまりにをさまつたものはあんまりある

まい。僕の見たのは一尺位のものだつたが、これが例の燕尾服・白チョッキですまし返つて、水際をうろついてゐる所は、いやはや呑みこんだものであつた。身の丈三尺もあるといふ種類のをさまり方が思ひやられる。

何分氷雪の外に見るものゝない處とて、よくく無聊に苦しむものと見えて、何かかはつたことがあると、ペンギンどもは随分遠方まで見に来る。大勢で来る時は、必ず指揮官が一人ついて、其の指揮に従つて行く。彼のシャックルトンの一行が自動車を動かしたり、冬營の小屋を建てたりしたのがペンギン社會の大問題となつたと見えて、如何にも珍しさうに、熱心に見に来たといふ。

シャックルトン
Shackelton
(1874—) 英國の有名な南極探検家

大勢連れのペンギンが、途中で人間か犬かに出會つた時は大變である。假に彼方から人間が來たと見ると、ペンギン一同遠くではたと立ちどまる。先づ一行中の雄が一羽出て、恭しく頭を下げる。やゝ伏目になつたまゝで、何やらん長々と挨拶の言葉がある。不幸にして人間には唯かゝゝがあゝと聞えるばかりである。挨拶の言葉が終つて後、始めて頭を上げて、今度はずつと仰向いて、嘴で大きな輪を一つ書いて、さてひよつと人の顔を見る。「お分りになりましたか」といふ風だ。

もとより以てお分りになるべき筈のものでない。人間はほかんとして立つたまゝだ。此に於てペンギンは、此奴分

らぬわいと見て取つて、今一度前の挨拶を長々と繰返す。それでも分らぬと見たら、今度は他のペンギンどもが、がやがや言つて承知しない。そこで前に挨拶に出た男が、大いに面目を失つて引下ると、今度は代り合ひまして、代り榮えもいたしませぬ別の雄鳥が出て来て、又前と同じかゝゝがあゝゝをやる。

相手が人間なら、譯の分らぬ長ぜりふも面白半分我慢して聞いてやるが、これが犬でゝもあつたら、それこそ騒ぎだ。或時ペンギンどもが右の順序で犬に挨拶をしたが、固より犬に分らう筈はない。そこでペンギンが腹を立てゝ三羽一時に例のかゝゝがあゝゝをやり出した。犬は面喰つて

わんゝと吠える。他のペンギンはきよとんとして呆れて見てゐる。之を見てゐた人間は、いづれも腹を抱へざるはなかつたといふ。

最後に斷つておくが、ペンギンは南半球特有の鳥であつて、最も多く居るのは、南極圏内及び其の附近である。

(へちまの皮)

相馬御風

名は昌治

文學者

明治十六年新潟

縣糸魚川町生

二二 春待つ心

相馬御風

六七尺も積つてゐた雪が、いつの間にかすつかり消えてしまつた。解けた雪は解けるあとから、殆ど全く人間に氣づかれずに、或は蒸發し、或は大地に吸ひこまれ、或は流れ去つ

て、どうして無くなつたか解らぬやうに、無くなつてしまつた。

筆蹟

手把_ニ兔角_ヲ杖_ニ、
身披_ニ空華_ヲ衣_ニ、
足著_ニ龜毛_ヲ履_ニ、
口吟_ニ無聲_ヲ詩_ニ、
良寛書

ふたふたふたふた
ふたふたふたふた
ふたふたふたふた
ふたふたふたふた
ふたふたふたふた

良寛筆蹟

幾月かの永い間、深い雪の中に閉ぢこめられてゐた北國の子供等が、久しぶりで黒い大地の面を見出したときに歡ぶ有様は、全く言ひ表はしやうのないものである。まだ可なり深く消残つてゐる雪の處々に黒く濕つた土が覗きはじめると、子供等は申し合せた如くつぎつぎにそこへ集つて行く。そして殆ど躍り出さんばかり

の嬉しさうな様子で、土を踏廻る。田や畑の處々に見え出

した黒土の斑點には、鷗や鴉や雀がまづ群をなして集る。

彼等の上にもいきくした歡が輝いて見える。

むらぎもの心たのしも、春の日に

鳥のむらがりあそぶを見れば。

かう良寛が歌つた心もちも、雪國に住んだ者でなければ、深

い味ひは分らないであらう。

「長々の月日、雪の下に忍びたる落浦公英のたぐひ、やをら春吹く風の時を得て、雪間々々を嬉しげに首さしのべて」と一茶が書いた若草の歡も、雪國に住む者のしみと、味はひ得ることである。大地を踏歩く人の足音の久しく聞

良寛

越後の隠逸歌僧
天保二年（一八一七）
寂
年七十四

一茶

小林彌太郎
信濃の俳人
文政十年（一八二七）
歿
年六十五

えなかつたのを、静かな夜にふつと聞きつけた時の一種微妙な懐かしみと歡、そんな心の經驗も、雪國に住めばこそ味はへるのである。

あづさ弓春になりなば、草の庵を

とく訪ひてまし、逢ひたきものを。

かうした人間味の極致を示したやうな秀歌の良寛にあつたことも、北國の冬といふことを全然頭に入れないでは、なかなか理解されまいと思ふ。

全く北國の住民の春を待つ心には、生そのものゝ味ひの測り知れない深さが窺はれるのである。 (翻かげ)

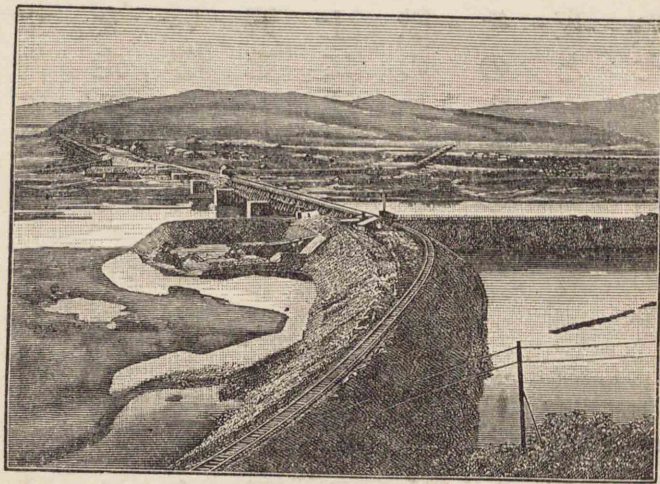
二三 シベリヤの旅

シベリヤ
Siberia
ウエルフネウー
デンスク
Verkhne
Udinsk

車内にごろりとしてゐても汗がにじみ出る暑いシベリヤを走ること二日、ウエルフネウーデンスク驛のあたり、新しい勞農社會主義共和國聯合の國民たる蒙古人の多いのに興を惹かれ、そして、彼等の目も亦物言はまほしげに我等の上に集るを感じつゝ、北へ、更に北へ、曠野をのたうち廻る怪獸の如く、われらの汽車は走りに走る。

その夜である。

夜といつても、故國の夏の夕方の六時頃よりもつと明るい、それで時計の針は十時を過ぎてゐるのである。汽車は、シベリヤ名代の白樺の林に分けいつた。白樺といへば、こ



シベリヤ鐵道

ここまで来る道も、われらの汽車は白樺を燃料として、夢の如く淡く消える乳白色の煙を吐きつゝ進んで來たのだ。漸く夕闇が迫つて來た。窓の左右は、文字通りにはて知らぬ白樺の林である。林の奥は晝尙暗しの感があるがそこに茂る白樺の幹、さては枝のそれゝは、暮れなやむ夕べの微光を吸つて、白金の如く、象牙の如く、怪しげなる光を放つ。白夜！ さうだ、白

夜の國に入りつゝあるのだ。停るべき驛とてもないので、汽車は、轟々又轟々、千古の深林の靜寂を破つて突進する。吐きだされた煙がちぎれて、林に迷ひ入り、まだ芽ぐみもせぬ白樺の枝々に絡みつき、梢を傳ひ、銀と緑と黒とを溶いて展べた鏡ともいひたい空に、また大自然の祕密をそのまゝ包むが如き林の奥の闇に、飄々として吸はれてゆく。走りつゞくること二時間餘、さすがにわれらの怪獸も疲れ、たか、林を切り開き、白樺の薪を處狭きまで積んだ小驛に喘ぎ喘ぎ脚を停めた。給水するのであらう、それらしい響が前方機關車のあたりから聞えてくる。車外に出てみると、昨日とは打つて變つて、刺すやうな冷た

い風が頬を撫でる。時計は十二時を過ぐる數分、日はもうとつぷりと暮れて、車内の人々の眠を守るやう、蒼く磨かれた星は空一杯、燦としてきらめいてゐる。われらは頭をあげて北とおぼしき空を眺めた。故國で見なれた北斗七星、彼の何か意味ありげに並んでゐる七つの星を見て、懐かしいものに接する氣分を味はひたかつたのだ。ところが、たい、どう見てもない。いかにシベリヤは謎の國の一角だとはいへ、星まで消える筈はなからうと見直すと、何のこと、われらの頭上、正しく垂線を描いたあたりにあるではないか。北斗を頭上に仰ぐところ、我等は、もうそんなところまで來てしまつたのかと、星に對してぼんやりものを思つてゐた

ら、發車の合圖の鐘が鳴つた。あわてゝ車上に駆けあがつた刹那、餘韻長く汽笛は鳴つた。

Blanket
毛布

Sweater
汗襦袢

しばらくして寢ようと、ブランケットをかぶつたはよいが、しみとと寒い。また起き出して、慈母が手づから編んでくれたスウェーターを着込み、外套やら何やら懸けて枕に就く。將に眠らうとしても、一度外を見ると、車窓を流れ出る灰暗い燈光の末、林間ところどころに、残雪の皚々たるが目に入つた。

「大べらばうなシベリヤ！ 昨日の酷暑と比べてどうしたといふのだ。」
思はずも、かうつぶやいたのである。

カーテン
窓掛

どれほど眠つたであらう、幾度か寒氣に夢をやぶられつゝ、
うとくしたと思ふ間もなく、また眼がさめた。と、汽車は、
轍のきしり靜かに、危険な個所でも過ぎるのか、匍ふやうに
して進んでゐる。「どうしたのだらう」。さう思つて、頭をも
たげ、ひよいと窓外をのぞくべくカーテンをよせると、これ
はどうだ。麓を曉の闇に沈めた雪の連山が、巍々また蜿蜒、
星の消えのこる深い藍色の大空を背景に、ほつかりとうき
出してゐる。

「あつ」といつたまゝ二の句のつげぬわれらは、むつくり飛起
きて窓に倚つた。眼を凝らせば、大地と思つた眼下は森々
たる湖水、水の面の平板をやぶるものは、氷の島にちがひな

バイカル湖
シベリヤ中部
の淡水湖



バイカル湖の畔

い。バイカル湖だ。そしてバイカルの連山だ。おゝ、こゝ
を眠り過して、どうしてシベリヤ
を通つたといはれようぞ。
まだ日は地平線を出ない。
東から西へ、大空はくつきりと光
の濃淡を織出し、雪の連山の中腹
以上のみが、その肌を見せたのだ。
頂上は、いたゞく雪を淡い紅に染
め、漸次麓に下るに従ひ、紅は紫に、
紫は暗綠色に、そして朦朧たる曉
闇に、腰から下をひたしてゐる。

汽車は湖畔をうねり、幾度かトンネルを出ては渚を傳ひ、飽くまでもしめやかに、——さうだ、心あつてこの莊嚴なる湖畔の曙の靜寂を破らぬやう、——行き行くのである。まだ、日は出ない。

それでも雪の連山は、分また分ごとに衣を更へる。頂上の薄い紅は漸く濃くなり、紫だつた中腹は、かはつて淡い紅になつた。さうして麓一體が漸次にあざやかな紫に變じて行く。

同時にまた、空の色、水のおもて、氷の島々、それが皆忙しく衣をかへる。萬象をして思のまゝのけはひを現させるべく、日もゆつたりと出るらしい。

やがて日が出る。

巨人が光をつかんで、八紘に抛げつけたその瞬間！それは、世界創造の黎明、萬象がはじめて形を得た歡喜に酔ふ刹那と何處がちがはう。今はそれだ。雪の連山は面はゆげにその肌の全部を見せ、麓の方、われらの對岸に當る湖畔一體、清淨純白の雪と氷とは、まさしく喜に燃えてゐる。

日が地平線を離れる。

森々たる湖上、どれだけ廣いか見當もつかぬ湖上、それは、その涯を素絹の織目のやうに地平線に沒してゐる雪の連山の屏風にまもられ、小波一つさゝやくを見ない。のみならず、湖面の半ば以上は、五月も末に近いといふのに、まだ氷原

ツァール
Czar 露國皇帝

である。廿年前、廿七八年役の當時、われらが今走つてゐる湖岸の鐵道工事は、かどらぬ苦しさ、ツァール政府は、この湖の水の上に鐵路を敷き、運輸を急がせた話がある。その時、さすが堪忍づよい湖水の神も、靜寂と莊嚴とを破られる腹立たしさから、水の一角を破つて列車を沈めたと、傳説に近い實話が残つてゐる。生きながら氷の底に沈んだ兵士の靈は、今なほこのあたりに迷つてゐるであらう。日が漸く高くなる。

われらの汽車は湖畔を走ること四時間餘にして、煙の出ぬ汽船が數隻、赤さびた船腹をのぞかせて埠頭に繋がるバイカル驛についた。こゝで、給水である。乗客は皆起き出し

て、赤露政府の禁制とあつて、寫眞器はかつぎ出せぬが、雙眼鏡などを携へて、渚に急ぐ。

まのあたり渚に來て見ると、水の清さはまた別段である。浮いてゐる氷の島々は、いづれも水面下に、水上の幾倍かの氷をかくしてゐるが、さて、濁るを知らぬ水はこれを乳白色にのぞかせて、折角隠した氷の苦心をむなしくさせてゐる。その水の冷たさよ。

澄みきつた大氣、おゝ、呼ばゝ、答へ、手を伸べなば湖面をわたつて來さうな連山、汝の神々しさはいづれの日までつゞくか。山に對してさながら大聖に對するが如く、黙々として見入つてゐると、脚下近く、氷の島の一角が碎け散つた。と

見たのは氷の島ではなかつた、氷の上に翼を休めてゐた雪よりも白い鵲鴿に似た小鳥であつた。唯一の生物——小鳥はいづこともなく飛んで行く。(東京日日新聞)

二四 浦潮より

太田覺眠

Vladivostok
シベリヤ東部の港

太田覺眠

西本願寺派の僧

慶應二年(一五七)

伊勢國四日市市

生

川上事務官

時の貿易事務官

川上俊彦

莫斯科總領事

南滿洲鐵道株式

會社理事

文久元年(一五二)

江戸生

拜啓野衲も川上事務官と共に最後の引揚船にて歸朝致すも中上置以處西比利亞内地奥深く入込み居る同胞を諸河結氷のため水路の交通全く断絶致す以今日如何なる手段を取らも引揚船出帆の期

日迄に當港へ到着の見込到底なく幾百の同胞は餘儀なく残留すも事にお成中候令後令々本國の保護を離れ心細く敵國內に残留すも同胞の心情を察する時は野衲も如何ふしてもさ方憐むべき同胞を棄てず歸郷するに忍びず断然敵國內に踏留る事に決心致候野衲もこの事を事務官より申出てたゞ時事務官ハ野衲の行爲を以て政府の命令に背くものなりと一色を作て止めたり

且曰く君を露國政府の保護に安んずんとする
 かと野村曰く予は露國の保護に安んずるものに
 あらずその危険に甘んずんとするものなりや
 貴官は居留民の唯一の頼とする帝國の國旗
 を收めて此の地を引拂さんとす今後殘留の同
 胞はそれ誰をも頼まむ予は身僧侶として此
 の人々の境遇を見て歎く上ること能く固よ
 り死は疾くは覺悟せりと事務なる突然起
 つて野村の手を執つて曰く予は最早君の志を

沮止せざるべし予も國民に代つて君の高義を
 感謝するは我が政府に對し君一人を見殺す
 る責を甘んじて之を受かん君もふ佛院の大悲
 を發揮せんと相對して思ふに感涙は咽ぶや
 あつて曰く前程遙遠なり相當の準備ありや
 と野村曰く一片の丹心一軀の尊像是我が為
 に千萬の味方なり而して囊中尚百金の餘財
 ありと事務官直に囊底を拂つて巨額の路銀を
 惠まれ且種々の注意を與へる候旅順開戦の

事は已に聞得たり當港より戒嚴令を布かれ
ゆゑ最早日本人の居住を許さず唯今事務官
一行の乗込めり引揚船曳見送りたるん後にハ
當港に日本人とては野衲唯一人として候目下
露人の暴行よりを寧ろ支那労働者の家財
を奪ふんとて襲ひ来る勢甚だ猖獗を極め居候
野衲一人の力到底之を防ぐに由なし今夜ハ彌
彌壇の下に隠まり一夜を明し彼等の掠奪
を忍びきり免明朝一番汽車にてハッロフスク

に到り順次黒龍江沿岸地方に残留せる同胞
咸に慰問致さるゝ野衲より生還を期せ
ずんども唯此の上は一日も永く命を保ち
て一人も多量の人を慰問したまふ心願
あり候野衲の此の行必ず大悲の所冥見あら
せ給ふを確信致候迄は東方を望みて
陛下の萬歳を祝し奉り候なり

明治三十七年二月十三日浦潮斯德港棧橋より

太田覺眠

吉江孤雁

名は喬松

佛文學者

早稻田大學教授

明治十三年長野

縣生

アルプス

フランス・ス

Alps

ウィス・イタ

リリーに跨る大

山脈

二五 角笛の響

吉江孤雁

フランスのアルプス山へ行きますと、夕方など、霧のかゝつて来る草原や杉の森の中から角笛の響が遠く近く聞えて來ます。谿を隔てた向ふの山から、その響が林や丘や谷間に飮して、悲しく、物寂しく、小暗くなつた小路の上へかすかにたゆたひます。

何のための角笛でせう。これは終日草原へ放しておいた羊の群を呼集めるために牧童が吹く笛の音です。羊は高く伸びた草の中や、夏草の花の咲きみちた森蔭を自由に遊びまはつて、思はず遠くにさ迷つてゐる中に日が暮れます。



羊の放牧

それを番してゐる羊飼の子供は、まづ犬をやつて集めます。羊飼の犬くらゐ賢いものはありません。幾十幾百とも知れぬ白い羊の群は、草原から、森の中から、八方から犬に教へられて、むくくと雲の涌くやうに、一つ處へ集つて來ます。犬は鳴きながら、八方を駈廻つて、草の中へ、森の中へ、谿の中へ飛込んで、後れて途を失つた羊を一匹残らず探しだします。その集つて來た羊のまはりを、前へ、後へ、左右へ駈廻つて、後れたものを叱りつ

古い物語

西暦七百七十八年
のシャルマーニ
ニエ帝のスペイン
征伐の史實をも
とにして第十
一世紀の中頃ロ
ーランの歌と題
する敘事詩によ
まれた騎士物語

け、弱つたものをいたはり勵ますやうにして、次第に羊小舎の方へつれて來ます。それでもまだ見落されて迷つてゐる羊が草の中に居るかも知れません。羊飼は角笛を吹立ています。その響があたりの林や谿に響き渡ると、どんな處に迷つてゐるものでも、必ずその響をたよりに集つて來ます。中には頸に鈴をつけた羊もゐます。その鈴の響が、夕暗の中で、草の葉の茂つてゐる中から聞えて來るのは、いかにも寂しい、また懐かしいものです。

この角笛の響には、フランスの古い物語がこもつてゐます。今日アルプスの山中でこの羊飼の笛の音を夏の夕方耳にした人ならば、必ずその物語を思ひ出すでせう。その話と

シャルマーニ
大帝

Charlemagne
(742-814)
の王
フランク族

ピレネ
Pyrenees
フランスとス
ペインとの國
境に連る山脈

いふのは次のとおりです。

昔、今から千百年以上も昔のことです。フランスとドイツとの兩國に互つて廣大な領土を占めてゐたシャルマーニエ大帝といふえらい王様がありました。當時のヨーロッパは一時全くこの王様の支配を受けたくらゐの勢でした。ところが、その頃アラビヤ人は地中海からスペインへ攻込んでこれを侵掠し、その鼻息が非常に荒うございました。それゆゑ、大帝に對しても決して服従しません。大帝は大層怒つて、是非このアラビヤ人を征服しようと決心し、軍隊を率ゐてピレネといふ高い山を越え、スペインへとはいりこみました。そして首尾よく征服の目的を果して、愈、フラ

ンスへ引上げて來ることになつたのです。さてシャルマーニユ大帝は隊伍を整へて凱旋の途に上り、今やしづくゝと國境のピレネ山にさしかゝつて來ました。何せよ戰場に數月を過した人々です。早く故郷の空が仰ぎたい、故國の山川が眺めたい、そしてあの美しいフランスの土地から出る紫の葡萄が食べたい、その葡萄で造つた葡萄酒の香が嗅ぎたい。人々は同じ思に胸を躍らせながら山を登つて來ます。部下の者どもがこんなにはしやいてゐるにもかゝはらず、大帝一人だけは何となく沈んだやうな顔附をして、黙々としてゐました。それは何故でせう。申すまでもありません、いつも自分の傍を離れずにゐた甥

ローラン
Roland
(—778)

のローランといふ英雄が傍にゐないためでした。ローランはその時何處にゐたでせうか。この英雄は、大帝の軍隊がスペインを引上げる時、その軍隊の殿しんがりになつて、最後から敵を抑へる任に當つてゐました。といふのは、アラビヤ人は大帝と和睦の約束を結びましたけれども何時その約束を破つて謀叛を起さないとも限りません。それが爲最もすぐれた勇者のローランが最後に残つて、その様子を見て引上げることになりました。そして若しアラビヤ人が叛いて背後から襲ひかゝつたならば、たゞちに角笛を吹いて急を告げる約束になつてゐます。それで若しその角笛の響が聞えたならば、大帝の軍はすぐ引返して後陣のローラ

ンを援ける筈になつてゐたのです。

大帝の部下は勇みに勇んで山路を登りつめて、もうそろそろ下り坂の方へ向つてゐました。フランスの空が彼等の眼の前に輝きました。美しいフランスの平野が彼等の脚の下へ廣がりました。彼等は躍り上つて萬歳を叫びました。けれど大帝一人はやはり黙つて、沈んだ顔附をしてゐました。そして今部下が叫んだ萬歳の聲がまだ消えてしまはないうちに、大帝は遙か後方で、角笛の響がしたやうに思つたのです。大帝は不意に馬を停めて、じつと耳を澄しました。大帝はまたたしかにその角笛の響を聞いたやうに思ひました。大帝は部下を顧みて、今角笛が聞えたでは

ないか、ローランの角笛が」と言ひました。部下のものも立止まつて耳を澄しました。けれどその時は、たゞ溪を走る水の音と、林の中の風の響しか聞えませんが、皆のものは、大帝に、「それは風か水の音でせう」と言ひました。軍隊はまた大帝を圍んで坂を下り始めました。けれど大帝は甥のローランのことが何分にも氣にかゝつてなりません。部下の軍隊が悦び騒ぐ中に、たゞ一人黙々として馬を進めてゐました。

すると、今度はたしかにはつきりと「ぼう、ぼう」といふ角笛の響が、人馬の騒のなかに聞えて來ました。大帝は「そらつ」といつて馬の頭を立てなほしました。今度こそは明かに皆

のものゝ耳に聞えました。部下のものも一時に足をとめて、聞耳を立てました。角笛はなほ斷續して響いて來ます。「ぼう、ぼう」。太く、細く、怨むが如く、怒るが如く、訴へるやうな、救を求めるやうな、急を告げるやうな聲が、林の奥から、溪の中から、一面に響き渡りました。忽ち大帝の號令は下りました。「返せ」。全軍は一時に引返して、ピレネ山をスペインの方へと駈けおりました。

ローランは一體どうしたのでせうか。彼は四五人の従者と共に軍隊の最後からしづくゝと山路へかゝつて來たのでした。すると、大帝が心配してゐた通り、それまで従順な風をしてゐたアラビヤ人等は、俄かに大きな喊聲を揚げて、

大勢一時に兵器を執つて、ローランの後からどつと襲ひかかつて來るのでした。彼等が恐れてゐたのはこの英雄ローランとその部下とです。今そのローランが僅かの勢を率ゐて軍の最後から山路へ懸るのを見ると、この人々を討取つてしまひさへすれば、シャルマーニユの大軍とても恐るゝに足らぬと思つたのでせう。いちはやくローランの身邊を八方から取巻いて、兵器をつきつけて來るのでした。そして口々に「ローランよ、早く我が軍に降れ。でなければお前の命はないぞ。シャルマーニユの軍はお前を置いてもはや遠く行つてしまつた」と叫ぶのでした。ローランはその中に突立つて八方を睨みつけ「汚らはしい。何で汝等

Durendal
デュランダール

に降参するものか。汝等蠻人よ、我が劍一度鞘を脱すれば、汝等の頭は木の葉のやうに吹飛んでしまふぞ。」と大喝しました。その勢に怯ぢて、アラビヤ人等は蜘蛛の子の如く一時四方へ散りましたが、いつの間にかまた多數を恃んで集つて來ます。従者は約束の角笛を吹立てようと思いました。が、ローランはそれをとめて吹かせません。そして彼の愛してゐた名劍デュランダールを拔放つて、獅子王のやうに狂ひまはりました。アラビヤ人等は、その度ごとに、わあといつて逃げおるけれど、執念くもまた攻寄せて來ます。斬殺され、踏殺されて、周圍にはアラビヤ人の死體が山と重りました。けれども多勢を恃むアラビヤ人は一向にひる

まず攻寄せます。或者は山路を上へ登つて大きな岩を動かして、ローランをおどしつけて、早く降参せよ。それでなければ此の岩を落して皆殺しにするぞ。」と言ひました。ローランが嘲笑つて身を飛びのけたと思ふと、その大岩は非常な響を立て、却てアラビヤ人等の中へ轉げ落ち、多數の者を壓しつぶしました。

けれど多勢に無勢です、流石豪氣のローランも新手を差換へ入換へての攻手の爲に、次第々々に疲れて來ました。部下の者も或は傷つき、或は死にました。もう如何とも仕方がありません。彼は自ら角笛を取上げて、息のかぎり吹立てました。角笛の吹口はローランの口から出る血で赤く

染りました。二聲三聲、その聲は恐しい大きな牛の最期の叫のやうに飮して、山々谷々に鳴り渡りました。



オリヴィエ
Oliver

中に、彼の親友で、いつも彼と共にシャルマーニュ大帝を助けて働いたオリヴィエといふものが傷ついて倒れました。彼はローランの名を呼んで、「神様は御身を守り給ふ」といひ

それを見ると、アラビヤ人等は
一齊に聲をあげて、森の八方か
らローランを取巻いて肉薄し
ました。彼は死者狂になつて、
期最の
荒れ廻り、跳び廻り、人間業とも
思はれぬ働をしました。その

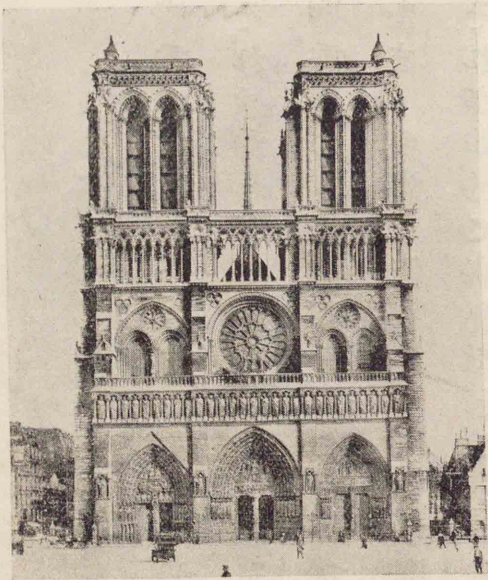
つゝ息を引取つてしまひました。

流石のローランも、今は最期の時が來たと覺悟をきめました。が、それにしても、自分が今まで幾百回となく戦ふ毎に勝つて、肌身を離さなかつた愛劍デュランダールを蠻人の手に渡したくない、むしろ岩を切つて劍を打折つてしまはうと、傍の大岩にはつしとばかり切りつけました。すると、その劍の先から火花がぱつと散りました。その時ローランは、今まで自分が戦つて來た幾度かの勝利の姿がまざまざとその火花の中に浮び上るのを見ました。「おゝデュランダールよ。御身は私と共にシャルマーニュを助けて、多くの國、多くの土地を征服して來た。けれど、もう私も最期

だ。神よ、フランスを救ひ給へ。」彼はさう言ふや否や、大きな眼に涙を湛へて、一本の松の樹陰へ倒れてしまひました。丁度その時です、ローランの閉ぢて行く眼の前へ、六萬のフランスの兵士が、怒り狂ふシャルマーニュ大帝を先頭に、鬨の聲をあげ、アラビヤ人等を追ひまくりつゝ、殺到したのは。大帝は樹陰に倒れてゐるローランの姿を見るなり駈寄つて、それを抱き起しました。しかし、この英雄は最早この世の人ではなかつたのです、命の限り吹立てた角笛の響はまだ谷の奥に飢して残つてゐましたが。

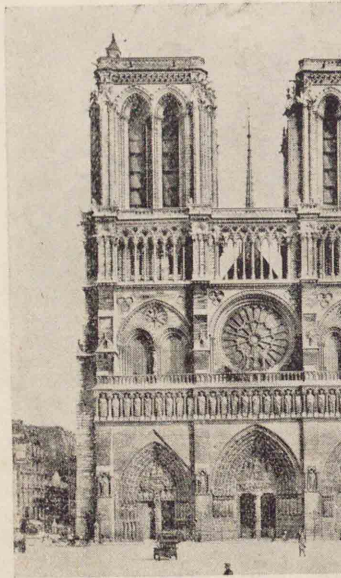
やがてこの大帝の怒と悲みとが、恐しい重い罰となつて敵のアラビヤ人の上に加へられたことは言ふまでもありません。

せん。大帝が馬に跨り、その馬の前の右と左とにローランとオリヴィエとが立つてゐる勇ましい姿は、今日パリへ行



院 寺 ム ダ ル ト ー ノ

な、物寂しげな、そして舊い、昔物語を籠めた不思議な響
で一度でもこの角笛の音を耳にしたものには、その悲しげ



院 寺 ム ダ ル ト ノ

く人ならば、何人もノ
トル、ダムのお寺の前に
見出すでせう。角笛の
響の中には、今もなほこ
の英雄ローランの最期
の恨がこもつてゐます。
夏の夕方アルプス山中

が、永久忘れることの出来ない思出となつて残つてゐること
とでせう。(角笛のひびき)

北原白秋

詩人

名は隆吉

明治十八年福岡

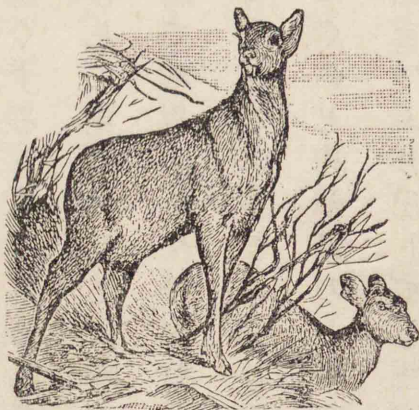
縣柳河町生

二六 専心

北原白秋

麝香の鑑定をする支那人の話が面白い。

それは神わざに近いものである。一體麝香といふものは、
麝香鹿の腹部にある囊にはひつてゐるもので、其のはひつ
たまゝの囊を圓くくりぬいて、麝香商の家へ賣りに来る。
それが非常に高價なところから、賣る方でも、此の頃は愈々
なくなつて、囊の中に鉛を入れて、知らぬ顔で持つて來ると
いふのである。其の鉛の入れ方も愈々巧妙になつて來て、た



麝香鹿

だ天秤にかけただけでは、其の重さといひ、香といひ、色艶と
いひ、正真正銘とすぐに見わけがつかない。そこで麝香商
の店にも、その鑑定をする男を一人必ず雇ひ入れてあるさ
うである。其の鑑定の仕方が
又悠長なものである。其の男
は一方の掌の上に本物の麝香
を載せ、一方の掌に新しいのを
載せると、兩手を互にゆつくり
と上げ下げしてゐる。唯それ
だけで、其の兩方の重さを掌の中で上げ下げしながら量つ
てゐる。さうして、これが本物か、いかさま物か、愈々どつちか

分るまでは、一時間でも、二時間でも、半日でも、兩手をたゞ上げ下げしてゐる。

暫くすると、手の上の麝香を入れ換へて見たり、又元の手に移して見たりしては、唯上げ下げしてゐる。全く氣の長い話であるが、それでちやんと解つてしまふから驚く。そこで愈々怪しいときめてしまふと、いきなり鋭いナイフを執つて、ぐいと其の囊の中へ突込んで、きり／＼と割つて、ぽんと鉛をはふり出してしまふ。其の鑑定が、又千に一つの外れはないといふのだから、猶更驚くのである。

其の掌の上の觸覺の微妙纖細な事は、唯それだけを鍛へ抜いたお蔭とはいへ、全く技神に入ると言つていい。それは

ナイフ
Knife

驚くべき一種の専心の賜である。

由來支那人といへば、流石に大陸の人間だけあつて、よろづ大まかで、如何にもゆつくりしてゐるが、其の専門的の事にかけると、全く小賢しい國民などの思ひも寄らぬ妙技を發揮する。これは一に専心な鍛錬の結果で、何事も其のねばり強い執着と大愚に近いまでの氣長な修道心とから、遂には人間以上の不可思議にまで達したのである。

金銀の鑑定なども、それは鋭いものだといふ。それなども、手の平に金貨・銀貨を一杯に取りまぜて載せると、其の五本の指先から一つづつ面白いほど早く落して行く。右手には細い一尺ばかりの鐵火箸やうのものを持つて、一つ／＼

落ちかゝるところを、怪しいと見ると、ちいんと弾き飛ばしてしまふ。それも千に一つの間違もない。それなどは、全く指先の感じから、落ちかゝるとすぐ直覺してしまふので、つまり専心修練の結果である。

それで、をかしい事には、さういふ麝香や金銀の鑑定をする男は、たゞそれだけのもので、世の中の事も知らなければ、何一つ外に能はない。たゞ一日中御馳走を食べて、掌を上げ下げしたり、鐵の棒でちいんとやるだけださうである。

一體人は、目に物を見ながら、頭に入れてゐない事が多い。私が外科の手術を受けて、永い間、下町の或病院にはひつてゐた時の事である。窓の前の中庭に檜と槓とが二本あつ

て、その間に物干竿が一本掛渡してあつた。いつもその方ばかり眺めてゐたので、それが目につかなかつた譯はない。それが驚いた事には、五十日餘りといふもの、全く頭の中に入つてゐなかつたのである。雨がびしょ／＼降つて、非常に陰氣な或日の午後であつた。手術の創痕が、其の日は取分けてきり／＼と痛む。あゝ痛い／＼、あゝ痛い、あゝ／＼と思つて庭の方を見てゐるうちに、その竿がはつきりと目に見えて來た。おや、あんな竿があつたのかと思つて、私は思はず目を見張つたが、五十日の餘もそれを見てゐながら、少しも氣がつかかなかつた自分の迂濶さ加減には、猶更吃驚してしまつた。情ない事だと思ふ。つい目と鼻との間だ。